属人区長の書簡 (2010年2月)

2010/02/08

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに!

聖ホセマリアがオプス・デイは女性 のためでもあることを見てから、今 月で80周年を迎えます。1928年10月 2日にパドレが創立の照らしを受け たとき、オプス・デイは男性のため だけだと考えていたのは周知のこと です。それゆえ、十数ヶ月後の1930 年2月14日、専門職と日常生活のあ らゆる状況において聖性を求めると いうメッセージを模範と言葉ですべ ての分野に伝えるために、主が女性 をも勘定に入れておられることを理 解させてくださったときの創立者の 驚きと喜びは、想像に難くありませ ん。後年、み摂理に対する感謝に満 ちて、こうコメントされています。 「主のみ旨がこのようにはっきりと 示されず、皆さん方に姉妹たちがい なかったならば、オプス・デイは本 当に片手が不自由であるようなもの

になるところでした。」[i] 娘たちよ、皆さん一人ひとりの責任がどれほど大きいかを私たちに理解されようと、創立者は頻繁にこう話されていました。少し横道に逸れますが、ある意向のために、天に取次ぎを頼んでくださるようにお願いします。皆さんにとって大きな喜びになるはずです。

聖ホセマリアは、1930年2月14日か ら、あらゆる職業や人種、また種々 の状況の女性の中に、オプス・デイ という社会の真っ只中での聖性の道 を切り開いていくために働かれまし た。今、至聖なる三位一体の神に対 して感謝しましょう。特に最初の頃 に克服すべき困難が多々あったにも かかわらず、その働きが深く根付 き、世界中に広まったからです。聖 ホセマリアがこの世のあらゆる現実 を聖化することについて説き始めた 1930-1940年代に、数知れない障害 が立ちはだかったのであれば、あら

ゆる正当な仕事を聖化する招きが女性たちに向けられたとき、どれほどの困難が現れるかを考えてみてください。

今日では、当然のことながら、多く の分野において女性には男性と同等 の可能性が認められていますが、80 年前はそうではありませんでした。 その頃は、例えば女性が大学で学ん だり、昔からあった手仕事は別にし て、家庭の外で什事に従事したりす ることは稀なことでした。ましてや 公的、社会的、あるいは学問的な分 野で責任ある地位につくなど考えら れないことでした。数十年後、第二 バチカン公会議はこう宣言しまし た。「時がきた。女性としての召し 出しが全面的に開花する時となっ た。これまで女性が決して到達し得 なかったほどの影響、重要さ、権力 を手に入れる時となった。それゆ え、人類がこれほどの大きな変化に 直面する時、福音の精神に満たされ

た女性たちは、人類が堕落しないために多大な貢献をすることができる。」[ii]

数知れない人たちの尽力によって、 民法上においても女性の尊厳と女性 の有する男性と同等の権利と義務が 認められるための長い道のりは進展 してきました。それに尽力した人た ちの一人として、特に聖ホセマリア を挙げることは、正義に適ったこと です。創立者は最初から、ご自分の 娘たちとオプス・デイに近づく女性 たちに、人間的活動の種々の分野に おいて、できる範囲でその頂点を目 指すよう励ましました。多くの出来 事が脳裏に浮かびます。知的能力に 恵まれた女性たちには、文化や科学 などの分野で専門家としての高いレ ベルに達するよう求める一方、他の 仕事が社会に大きく貢献することを 認識させることにも努めました。例 えば、世界中に、家事を専門職にす る多くの若い女性を育てる教育機関 ができることを熱望したことなどです。この仕事が、法律面においても 社会的な通念においても、相応しく 評価されるようにするためです。

属人区の信者たちが多くの善意の人 たちと固く一致して、キリスト教的 なこの女性観を広め根付かせるため に貢献し、今もそれを続けているこ とに対して、神に感謝しています。 しかし、すべき事は未だたくさん 残っています。女性の尊厳と役目が 幅広く認知されている社会がたくさ んある一方で、理解からほど遠い別 の社会もあります。いずれにしろ、 神の娘であり息子である私たちは、 この仕事を熱心に継続していかなけ ればなりません。そして、創立者が 記したことを示すべきです。「成長 とか、成熟とか、女性解放とかいう ことは、男と同じであること、つま り同質であることを求めたり、男の ような動作のまねをすることであっ てはなりません。そんなことをして

も何の得にもならず、かえって、女 性にとっては損失となるでしょう。 男性と比べて良いとか悪いとかとい うことではなく、異なったものだか らです。教会法や民法で認められて いる本質的な面では、女性も男性も なく同じく人として神の子の尊厳を 持っていますから、当然、平等の権 利を有しています。しかし、この基 本的な平等を出発点として各々が達 成すべきは、自己に相応しいもので あるはずです。したがってこの点か らみても、解放とは、独自の徳性、 つまり女性に共通の徳性や、女性の 個性を充分に発展させるための真の 可能性を開くことである言えるので はないでしょうか。平等の権利とか 法の前での機会均等とかは、社会の 宝であるこの多様性を、除外するの ではなく、考慮に入れて、より豊か に発展させてこそ意味があるのだと 思います。 | [iii]

私たちの感謝を表す最良の方法は、 2008年にオプス・デイ創立80周年を 記念したときと同じように、この一 年を聖母の御手に寄りすがって過ご すことだと考えました。それゆえ、 今月の14日から2011年の同日まで を、あらためてオプス・デイの〈マ リア年〉にすることに喜びを禁じ得 ません。この間、何よりもロザリオ の祈りをよく唱え、しっかりと黙想 し、家族や友人にこの信心を広める ことによって、聖母をよりよく誉め 称えるよう努めましょう。また特 に、属人区のセンターの物質的な面 の世話に携わっている女性たちの仕 事について、神に感謝しましょう。 それは、1928年、主が創立者にオプ ス・デイをお見せになった時に同時 に与えてくださった家族の雰囲気を 維持し、より良くするためにかけが えのない仕事なのです。

この〈マリア年〉の初めの数ヶ月間は、ベネディクト十六世が全教会の

望みになったことを見てとり、こう断言されました。「主はこう仰せになっているようです。オプス・デイの一致を壊してはなりません!一致を愛し、一致を守り、一致を促進しなさい。」[iv]

〈司祭的な魂〉とは、洗礼を受けた 人にもたらされる共通の司祭職を、 生活のあらゆる瞬間に実行する以外 の何ものでもありません。創立者 は、オプス・デイの信者の一人ひと りがそれを実行していることを主に 感謝していました。例えば、1960年 にこう説教しています。「司祭も信 徒も、皆が司祭的な魂を持っている と度々話してきました。さらに、私 は皆さんに、ペトロが述べる王の系 統を引く祭司として(1ペトロ2.9参 照)、私の子供たちは皆司祭であ る、と言います。それは、皆さんが 洗礼を受けているからだけではな く、vos estis lux mundi あなた方は 世の光だからです。光を隠すことは

できません。Non potest civitas abscondi supra montem posita(マタイ5,14)山の上にある町は、隠すことができないのです。キリストは十字架につけられました。それは全ての事柄をご自分に引き寄せるためです。そして私の子供たちは、人を主に引き寄せるため、人間のあらゆる気高い活動の頂点に十字架を立てようと努めるのです。 $\mid [v]$

の奉仕などの諸徳を、キリスト者の 精神で実践するようにと求めておら れました。こうして、ミサ聖祭は本 当に「キリスト者の内的生活の中心 となり根源」[vi] となり、ミサ聖祭 を一日中続けることになると結論づ けられたのです。

また、好んで詳しく説明されていま した。若者たちとの集いで、司祭的 な魂をどのように実行したらいいの かという質問に、こう答えられまし た。「司祭はどうあるべきだと思い ますか。犠牲の人、熱心な人、笑顔 の人、人を惹き付け、求める人を拒 まない人。そして、許し、理解し、 的確に忠告できる人などです。あな たはこういうことを、そして他にも 多くのことを知っているでしょう。 そして、あなたがそれを実行しよう と努めていると私は確信していま す。ですからあなたには司祭的な魂 があるのです。| [vii]

さらに、別の機会にはこう言われま した。「洗礼と堅信の秘跡によって もたらされたキリストの王的祭司職 に与りなさい。また、聖霊のもたら す特別な恩恵にも与って、多くの善 を実行することです。時には、皆さ んの一言が盲人の目を開き、皆さん の振る舞いが、足の不自由な人、つ まりキリスト者の生活をしていない 人を立ち上がらせ、皆さんと共に働 くようにするでしょう。他の折りに は、皆さんの勧めや教え、祈りに よって、悪臭を放つ死人がゆるしの 秘跡に与り、癒され、そして清めら れてあらゆる善を実行できるように なります。甦ったのです。| [viii]

これらの考察に照らして、ミサ聖祭 が本当に私たちの望みや意向を一つ にあわせる合流点になっているかど うか、また聖性と使徒職の熱意を高 める源泉になっているかどうかを、 糾明することができるでしょう。一 日のうちに出会う人々の中に、霊魂 を見ていますか。主が受けておられる攻撃を前にして、神へのでを表して、神へのでかった。されると、質うようにして、びないないでもと、でいると連帯中的に、大びでいるでいまでありた。ないは、新神の大の地震のようなにありたの、大が単なの地震のようなに終わらないます。

はキリストに『心をとらえられ』ました。彼の司牧の真の秘訣は、彼が告げ知らせ、ささげ、味わった聖体の神秘に対する愛です。この愛が、キリストの民であるキリスト者と、神を求める全ての人に対する愛となりました。」[ix]

数日前、教皇様が個人的に謁見して 下さいました。娘たち息子たち皆の 愛情と祈りとを携え、教皇様とその ご意向のために、いつも祈ってる ことをお伝えしました。このよい に、ペトロの後継者と固く一致し また教会の全ての司教と司祭、信者 と一致しつつ歩み続けましょう。 ネディクト十六世は、オプス・デイ の信者の全ての使徒職と、その一 ひとりを祝福して下さいました。

私が、私の意向のための皆さんの祈りを心から頼りにしていることは言うまでもありません。惜しみない心で祈り続けてください。

心からの愛情を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2010年2月1日

[i] 聖ホセマリア、1955年2月、家族の集まりの覚え書

[ii] 第二バチカン公会議、1965年12 月8日『女性へのメッセージ』3-4

[iii] 聖ホセマリア、Conversaciones, n. 87 (邦訳『女性』15ページ)

[iv] 聖ホセマリア、1958年2月14日 説教の覚え書

[v] 聖ホセマリア、1960年4月15日説 教の覚え書

[vi] 聖ホセマリア、『知識の香』87

[vii] 聖ホセマリア、1974年3月31日 家族の集いの覚え書

[viii] 聖ホセマリア、1972年10月家 族の集まりの覚え書

[ix] ベネディクト十六世、2009年8 月5日一般謁見の講話 pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2010nian-2yue/ (2025/12/10)